

学術大会開催報告

第13回学術大会開催報告

2011年10月24日～26日
於曹洞宗檀信徒会館3,4階

第13回学術大会が、2011年10月24日～26日の日程で、曹洞宗檀信徒会館(東京グランドホテル)にて開催されました。

第1日目は「東日本大震災をうけて、いま私たちに何ができるのかを考えるシンポジウム」が開催され、第2日目、3日目は、センター内外の71名の発表者による個人発表、及び当センターが取り組む研究プロジェクトの報告がありました。

3日間にわたる開催となりましたが、連日、多くの聴講者があり、盛会裡に幕を閉じました。

大会初日は、午前9時30分より、「桜の間」にて開会式が挙行されました。本尊上供の後、「東日本大震災・台風水害物故者追善法要」を設け、祈りを捧げました。その後、宗歌斉唱に引き続き、佐々木孝一宗務総長並びに池田魯参総合研究センター所長が挨拶しました。

続いて、「桜の間」にて、「東日本大震災をうけて、いま私たちに何ができるのかを考えるシンポジウム」が行われました。

東日本大震災では、津波などにより多くの尊い命が失われたほか、福島第一原発事故による様々な被害など、多くの人々の暮らしに多大な影響があり、今後も長期的な見通しを視野に入れた支援活動が必要とされています。このシンポジウムでは、被災者支援における僧侶のありかたを考えるとともに、社会における僧侶の役割や意義について議論を深めました。

10時より、第1部「被災者と共に歩む—東日本大震災の支援活動に学ぶ」が開催されました。

第1部では、現地、あるいは全国各地からの宗侶による、支援活動を振り返るとともに、宗門内外の



佐々木孝一 宗務総長



池田魯参 総合研究センター所長

様々な人々による、既存の枠組みを超える形での連携について、報告、検討しました。

初めに基調講演として、「現地ジャーナリストの視点から見た東日本大震災」と題して、河北新報編

集委員の寺島英弥氏から、現地の実情や僧侶による支援活動の紹介をいただき、さらに宗教者に求める役割や期待を示していただきました。

次に、「僧侶の支援活動から学ぶ、被災者支援の実際と課題」として、実際に被災地で支援活動を行われた宗侶より、「リレー発表」という形で報告・提言していただきました。発表では、現地でのボランティア活動の拠点的機能を果たしてきた全国曹洞宗青年会の活動についての発表に続いて、秋田・岩手・宮城・福島各県よりお一人ずつ、津波により親しい人を亡くされた方々のところに寄り添いながらの支援活動など具体的な活動を通しての課題や展望について発表いただきました。

昼食休憩をはさみ、午後1時から、パネル発表「組織の枠組みを超えた連携を目指して」が行われました。

発表では、ボランティア団体と宗教者との協力の必要性や可能性、電話相談による自死（自殺）対策への取り組みをしている団体における被災者を対象とした電話相談事業の成果、寺族と僧侶の連携による被災者の支援活動の可能性、傾聴活動などを通じての宗派間の協力のありかた、及び支援者同士の対立の問題、震災以前からここに問題を抱えておられる方々への支援のありかたなどについて、宗門内外の方々にお話しいただきました。

続いて、第2部「葬送・供養の心」が行われました。第2部では、震災で亡くなられた方々の葬送・供養を通して、死別悲嘆や喪失感を抱える人々に僧侶がどのように応えていけるか、ということについて考えました。



基調講演 寺島英弥氏



具体的な支援の様子に皆聞き入る



基調講演 鈴木岩弓氏

初めに、基調講演として東北大学の鈴木岩弓教授に「東日本大震災にみる弔いの諸相」と題してお話しいただきました。講演では、震災直後、緊急的な措置として土葬が採られていった経緯を示された上で、その後、仮土葬した遺体を火葬していく中で

学術大会開催報告

2011 → 2012

研究・研修報告

事業報告

在籍者紹介

研究成果中間報告

の遺族の意識の変化などについて、ご専門とされる宗教学や宗教民俗学の立場からお話いただきました。さらに、「宮城県宗教法人連絡協議会」が震災後に立ち上げた「こころの相談室」の活動も紹介され、電話相談や慰霊活動、講演など、教団、宗教の垣根を超えた支援のありかたについても言及されました。

その後、被災地で葬儀や供養に携わってこられた2名の宗侶の方々に、被災直後の様子から現在に至るまでの実態について報告いただきました。ご報告の中では、宗派、宗教を超えて、死者の安穏を祈ることやこころに寄り添うことの必要性が強調されたほか、様々なこころの葛藤を抱える遺族と向き合う現地僧侶の実態についてお話がありました。

最後に質疑応答があり、様々な立場の支援者が横断的、複合的に提携し、支援にあたることの必要性が指摘され、傾聴活動、あるいは葬送・供養といった実践を通して、人びとのこころに向き合い宗教者としての役割を果たしていくことが改めて確認されました。

大会2日目、3日目は個人発表が行われました。

今回は71名の発表がありました。曹洞宗学、禅思想、禅宗史など教理・教学に関わる発表のほか、教化理論や実践報告など布教・教化についての発表も多く見られました。今後も宗内の様々な意見やアイデアが本大会で交わされ、より建設的な議論がなされることが望まれます。

また、2日目には「桜の間」において、当センターの研究プロジェクトについての報告がありました。なお、平成23年度に発足した「布教・教化実



支援に関わられた多くの方々に発表していただいた



連日多くの聴講者が熱心に耳を傾けた

践モデル開発研究プロジェクト」による発表では、朝活禅研究班と自死問題研究班が宗門内外の協力者を含むプロジェクトメンバーによる座談会形式での発表が行われました。これは学術大会の発表方法における新たな試みと言えます。

今年度は3日間の開催となり、例年以上に充実した内容となりました。東日本大震災を受けて、僧侶が社会において果たすべき役割が問われている昨今ですが、だからこそ、本大会における研究成果を少しでも布教・教化の現場にフィードバックさせることが求められると考えております。